

審査総評



岡山理科大学 総合情報学部 建築学科
教授 後藤 義明

UD に配慮された建築物であるかどうかは、本来使う人が決めるべきではありますが、今回は、岡山県の UD アドバイザー、バリアフリーアドバイザーの他に、使用者の代表の方等、様々な立場の人たちで構成された審査委員会で議論をして決めました。審査委員それぞれの立場で作品に点数を付け、各自が良いと思った点や気付いた点等について、作品ごとに話し合いました。審査委員全員が現地を体験すべきですが、物理的に困難ですので、すべての応募作品を訪問して確認された県の担当者の方に質問する形で細かいところの確認をしました。

その結果、応募作品の中で、審査委員の合計点数が最も高かった倉敷自動車教習所を最優秀賞に選定しました。ただし、一点気になることがありました。視覚障がいの方が運転することがないためでしょうが、この施設には点字ブロックなどの配慮が備えられていませんでした。教習受講者と視覚障がい者の家族と一緒に施設に訪れ、家族が教習を受けている間に一人で待っていることもあるかも知れません。また、一般的に平気で点字ブロックの上に車を止める人もいます。今後の運転者の教育のためにも、視覚障がい者に配慮した施設になっていけばもっと良かったと思われます。

県民賞は、審査の点数も考慮した上で、一般投票で最も点数の高かったイオンモール倉敷を選定しました。

その他の応募作品も、ハートビル法やバリアフリー新法の認定を受けている建築物であるなど、それなりに質の高いレベルのものでした。しかし、法律に定められた基準を守ればいいというものでもありません。ユニバーサルデザインの考え方を提唱した故ロナルド・メイス氏は、アメリカの ADA（アメリカ障がい者法）に合致するように設計されたホテルでの出来事が、UD を推進するきっかけとなったと、最後のスピーチ（1998 年）で述べています。障がいがあり電動車いすを使用しているメイス氏は左手が使えませんでした。そのホテルの障がい者用の客室は各階に一つずつありましたが、すべて左利きを想定した作りになっていたので泊まることができなかったのです。基準を守っただけでは使えない人のことを考えたとは言えません。いろいろなユーザのことを考えて設計する必要があります。

この「わがまちの みんなのたてももの 2008 おかやま UD コンテスト」は、タイトルにありますように、2008 年の応募作品の中で、2008 年の評価の仕方で、最も UD に配慮したと思われる建築物を選定したものです。評価の仕方もどんどん改善されていきます。そのためにも、来年度以降、本コンテストが継続され、UD 化された優秀な作品が数多く応募され、評価されることで、岡山の建築物、社会の UD 化が進展することを望みます。